

かわら版 育種の波動

全国新品種育成者の会発行

年に2回 春と秋に講演会を開催 会員から育種賞・育種功労賞の推薦者を募集 本年初の役員会を開催

本年度初めてのとなる役員会が5月22日に開催され、主な行事の開催等についての検討が行われました。その結果、秋に開催する育成地等を視察する研修会は、コロナ禍のために取りやめ、それに代えて講演会を年2回春(6月下旬~7月)と秋(10月)にオンライン開催することとなりました。春の講演会については、育種賞等の受賞者等に当たって講師を頼み、早めに開催日等を決めることとします。

本年度の育種賞・育種功労賞の受賞者の選定については、12月に予定される選考委員会に向けて、事務局が候補者の推薦を10月20日までに受けることとなりました。事務局からは、「会員でなくとも受賞対象となるので、育種に取り組む多くの方の推薦をお願いしたい」との要望がありました。

また、改正種苗法の施行等を受けて、育成者権の保護・育成者の地位の向上等図るため、この度当会に種苗制度等検討委員会を当会に設置することとなりました。

改正種苗法の説明会を開催 活発な質問も出て、参加者40名が耳を傾ける

4月20日(火)オンラインによる改正種苗法の説明会が非会員を含む40名が参加して開催されました。この説明会は、当会からの要望に農林水産省知的財産課が応えて実現したもので、知的財産課の藤田室長が講師となって説明が行われました。終了後には、質疑応答の時間が設けられ、活発な質問が出されました。参加者からは、丁寧な説明でわかりやすかったとの声が多く聞かれました。

果物は品種を選んで楽しもう！！

YouTubeにより消費者に配信

ブドウの育種をしている林さん(当会副会長)は、「日本の品種はすごい」の執筆者である竹下大学さん、スムージー等の販売を行っている株式会社pomonaの橘将太さんと協力して、品種で果物を選び購入して楽しむためのユーチューブを作成し、4月14日に配信を行いました。

それぞれの農作物は、味、固さ、香り、加工のしやすさ、栄養価等が品種により様々な違いがあります。しかし、果物では柑橘のデコポン、ブドウの巨峰、シャインマスカットのように名が知られている品種もありますが、購入するものはほとんど産地名や販売価格等で選ばれているのが現状です。そのため、このユーチューブでは各品種の特徴等を語りながら、購入する果物を選ぶ際に品種を判断基準にすることで、バラエティに富んだ食生活等が得られることを消費者に伝えることにしています。

林さんは、「リアルタイムで消費者とつながることができるので、旬の作物を持ち寄って食べたりしてファンの数を増やし、今後も配信を続けていきたい」と話しています。



育種賞・育種功労賞受賞者の取組 2月の第34回総会で表彰された2人の育種の取組みを紹介します。

✳育種賞 奥隆善さん 三重県伊賀市在住

育種作物 : チョコレート・コスモス、ペチュニア、シレネ、カランコエ、リンドウ等

登録品種

ノエルルージュ、NEW CHOCO、赤とんぼ等(チョコレートコスモス)、プチパープル、ミルクィホワイト等(ペチュニア)、シラユキヒメ、ハッピーモモコ等(シレネ)、エスペランサ・ダブルオレンジ等(カランコエ)、06P1 奥 ダブルピンク、07B11 奥 ダブルブルー(リンドウ審査中)、いがむらさき(ブラシカ)

①育種を始めた背景、きっかけ

チョコレートコスモス: 原産地のメキシコでは野生種も絶滅したとのことなので、園芸的にその遺伝子を残す目的で研究を開始。



奥さんと「赤とんぼ」

シレネ: 白色花しかないという通説なので、桃色花の育成を目指した。

カランコエ：切り花にも使える高性のタイプの育成
リンドウ：実用性のある八重品種がほとんどないこ
とから、実用的な八重品種の育成を目指した。

②育成品種の特長

- ・コスモスの「ノエルルージュ」は、世界初のチョコレートコスモスとバナコスモスの交雑種で、耐病性が高く新規性のある花色（濃赤）、雑種由来のコスモスでは、他に茶、茶赤、赤橙等の花色品種を育成。
- ・ペチュニアの11品種は、コンパクトな草型の品種
- ・シレネの「モモコヒメ」は、それまでにない桃色品種
- ・カランコエの6品種は、切り花にも使える高性な品種
- ・リンドウの4品種は、八重の鉢花用矮性品種、特に「07B11 ダブルブルー」は三重咲き品種

③育成品種の普及状況

コスモス：「NEW CHOCO」は、EUと北米でも品種登録し、種苗販売している。「ノエルレッド」と「ブラウンルージュ奥4」は、切り花を自家生産し、国内市場と北米市場への輸出も行っている。

リンドウ：2品種を岩手県生産者に生産許諾し、市場出荷している。

④育種の方向性

市場の嗜好に合わせた形状の新規性よりも、耐候性を高めて気象変動にも耐える生産性を備えた品種を目指している。

②育成の経過、成果

「太陽」の実生から「サンルージュ」、「サンセプト」、「恋花火」を育成、その後、「サンルージュ」を親品種とした実生を育成し、10品種以上の品種を作出。その結果、25品種以上が栽培され、7月上旬～10月上旬まで4ヶ月に及ぶ切れ目のない出荷が可能となった。それにより、市場評価が高まり、高価格販売が実現した。

③育成品種の栽培 普及の取組みと成果

育成品種は、品種毎の栽培特性調査を行い、栽培方法の周知に取り組んでいる。2020年の部会のスモモ販売額は2億5千万円、渡辺さんの育成品種がその約50%を占めている。

④雪害に強い仕立て法の開発と普及

積雪1.5mを超える多雪地域であるため、苗木に竹を添えて雪に埋まらない高さまで幹を伸ばす主幹形仕立て法を開発。新規就農者中心に導入が拡大している。

⑤地域農家に対する栽培技術向上の取組み

JAの嘱託指導士として、栽培管理や剪定等の講習会を行って地域の生産者に栽培技術を指導するとともに、出荷目揃え会や出荷品の格付け等を実施し、出荷管理体制の指導に努めている。

⑥新規就農者の確保、育成

2013年に大江町就農研修生受入協議会を設立、会長として、新規就農者の確保に努めるとともに、就農希望者に栽培管理研修を2年間定期的に開催。研修生には町に働きかけて、住居や共同利用機械・施設の整備を行い、研修生19名のうち17名が就農。新規就農者の園地の巡回や学習会を実施し、基礎技術の向上に務めている。新規就農者の栽培面積は20haを超え、耕作放棄地の減少にも役立っている。これらの取り組みが評価され、平成30年度の全国優良経営体表彰で、担い手づくり部門の農林水産大臣賞を受賞した。

✿ 育種功労賞 渡辺誠一さん 山形県西村山郡
大江町在住

育種作物 : スモモ

育成品種 : サンルージュ、サンセプト、恋花火(以上登録品種) その他10品種以上を育成

①育種を始めた背景、きっかけ

昭和61年就農時、地域の品種は「大石早生」、「ソルダム」、「太陽」等の数品種のみで、すももの収穫期間は7月上旬～8月中旬の1ヶ月半程度で、品種ごとの出荷期に隙間があり、出荷先の受注に応じられないこともあった。



サンルージュ



サンセプト



わたしの育種奮闘記

この記事は本人から聞いた内容を、本人の話言葉で作成しています

照葉ハボタン「光子」が大反響

初めて農家になれたと感じた元サラリーマン

◎ 大塩芳弘さん：姫路城がそびえる兵庫県姫路市の東隣、播磨平野のほぼ中央に位置する加西市で、ハボタン、ビオラ、ペチュニア、ネメシアを生産している大塩芳弘です。今年2月から、全国新品種育成者の会に仲間入りさせていただきました。

私は、フォークリフトを営業するサラリーマンでしたが、独立して商売したいと思っていました。植物が好きだったので、24歳から県の農業者大学校で2年間学びましたが、就農には土地を探さなくてはなりません。市役所、農協等に当たった結果、半年後ようやく水田を手放したいという農家が見つかり、2001年6月に農家としてスタートすることができました。

先輩農家に兵庫県が産地であるハボタンの栽培を教わって生産を始めましたが、販売価格が安く、資材の購入費等を払うとほとんど金は残りませんでした。当時は独身で実家に暮らしていたので、何とか生活はしていましたが、収入を実家に入れることはできませんでした。

そんな状態が続いていた2003年のことです。栽培中のハボタンの中に葉に光沢のある一本の個体を見つけ、翌年に一般のハボタンと交配しました。葉に光沢のあるハボタン(以下「照葉ハボタン」)が数パーセント出現したので、その後交配を繰り返して優良表現個体の獲得を目指しながら数を増やし、「光子」の名を付けて売り出しました。「光子」は母の名前です。私は2004年に前年に見つけた照葉ハボタンと一般のハボタンを交配したものの、「大したものではないだろう」と放って置いたのですが、そこからできた種を、母が採って圃場に播いてくれたのです。新品種を生み出したのはそのおかげなので、母の名を品種名に使わせてもらったのです。

「光子」は、本格的に販売しようと大量生産した年に黒腐病にかかり、約4割を廃棄する損害を受けました。大量に生産してみて、寒さに強いが暑さに弱いことが分かるなど、私にとってはすべてが手探りの状態でした。それでも、「光子」の反響は予想以上に大きいものでした。新規参入農家であるためか、市場関係者から気さくに声をかけられることもなかったのですが、「市場に入る前から荷下ろしするトラックの前で花屋が待っているのを初めて見た」と言われたときは、うれしさがこみ上げてきました。初めて一人前の農家になれたというのがその時の素直な気持ちです。価格も、「光子」は一般のハボタンの3~4倍ですと取引されています。

「光子」に助けられて育種に興味を持った私は、全国の育種農家を訪ね、また農場に来てくれるメーカーのブリーダーとも意見交換を行って、育種を学ぶことができました。その結果、現在までハボタン6品種、ペチュニア6品種の登録が取れ、ペチュニア7品種、ネメシア2品種を出願申請しています。ペチュニアも、アンティークカラーで短日でも良く咲く品種を育成し、八重咲きはジュリエットシリーズ、一重咲きはモンローウォーク・シリーズとして販売し、人気を得ています。

私の生産した花は、全国の花市場、花の専門店に販売しています。私の育成品種は、自分で販売して消費者の反応が良かった品種については、私だけ

の生産とせず、水田種苗の紹介で、私が直接会って選んだ優良な生産者にも栽培してもらって販売量を増やし、消費者に届きやすいようにしています。育種



を武器にして差別化を図ってきたおかげで、他に代わるものがない状況にあり、コロナ禍ではありますが、幸い影響を受けずに済んでいます。私が開発した品種に対する消費者の喜びの声を聞くことが、育種へのモチベーションにもつながっています。

育種とは、植物の持つ隠れた魅力を引き出し、人に感動を与えられるものだと思います。私自身も、そのおかげで人とのつながりも増え、人生を豊かにすることができました。交配してできた種が発芽した瞬間は、私に大きな夢を見せてくれます。今後も、今までにない剣弁タイプのハボタン、消費者が感動する新たな色を持つ強健なペチュニアを作り出したいと思います。

そして、これまでに育成した品種は栄養繁殖で殖やしてきましたが、増殖コストがかかるため、種子での固定化技術、採種技術に磨きをかけてコストを抑え、品質の向上を目指したいと思っています。

目標を明確に持って続ければ育種は進む

育種の醍醐味は、きれい！素敵！と言われること

草野修一さん：宮崎市の西に位置し、国内最大級の照葉樹林を有し、2012年にユネスコ・エコパークに登録された綾町でランタンキュラスを育種し、生産している綾園芸の草野修一です。私は千葉大園芸学部を卒業した1978年に22歳で就農しました。義理の兄と共同で神奈川県に開設した「愛川園芸」で働いていましたが、1990宮崎県に「綾園芸」を創設し、父のバックアップで経営を行い、父が取り組むランタンキュラスの育種を始めました。父がランタンキュラスの魅力に出会ったのは1930年頃。雑誌で日系人のカリフォルニアでのランタンキュラスの大規模栽培の記事を読んで夢見ていた父は1933年に花の世界に入りました。戦後、サカタのタネの仕事を始め、1950年代前

半にその創始者坂田武雄氏がアメリカから持ってきた大輪系のランタンキュラスの種苗を見て育種をさせてほしいと懇願し、ランタンキュラスの育種を始めたと言いました。長年かかって切り花系F1ランタンキュラス「ビクトリアストレイン」を世に出し、その後鉢物のランタンキュラス「F1ワンダーランド」を作り、共に欧米で大ヒットしました。

1990年当時切り花ランタンキュラスは欧米では人気があったのに、日本では評価が低く普及しておらず、私はその訳を知ると、その壁を破り「ランタンキュラスをチューリップ並みに普及させたい」との思いから、切り花の生産と育種を始めたのです。

私は大学時代、浅山栄一先生と横井政人先生に園芸全般を、農場の渡部重吉郎先生に栽培を、育種と農場長を兼務していた飯塚宗男先生に育種を教えていただきました。また近くに父と技術の高い従業員もいて、栽培、育種、採種を学びました。サカタのタネの先輩たちからも、様々な育種のアドバイスをいただきました。

育種を始めた当初は、栽培する農家が儲かる品種を作ることに重点を置きました。その当時の品種（ビクトリアストレイン）は、花は大輪で花色もクリアな原色でとてもきれいでした。しかし、晩性で茎が太く曲がる性質がありました。欧米で人気があったのは、気候的に栽培適期が長いため、一番花の切り始めが早生系より1か月遅くても、栽培期間を通してみるとトータルでは沢山切れ、初めは太くて曲がる茎も途中から割と素直な茎になるからでした。しかし、栽培適期の短い日本では一番花の切り始めが1ヶ月遅いことは致命傷になってしまい、売り上げが思うほ



茎が太く曲がった品種 **茎が細くしなやかな豊産品種**
ど上がらなかったのです。またバブルの最盛期は、カスミソウの最盛期で軽い雰囲気のもの好まれ、重たい感じのランタンキュラスにとっては冬の時代でした。そこで早生、豊産、中輪、茎がすらっとしてしなやか、花色はクリアな原色、そしてF1という目標を設定しました。それに向かって育種を進めると、原色ではないのにいろいろな綺麗な花が出現しました。主にパステル調や、グリーン要素のある花、奇形とも思える変わった花卉の花等です。それを見て、

以前第一園芸に勤めていた妻が、「これは綺麗！絶対売れるよ！」と言いました。花屋のことは良くわからないので、「そういうものなのか？」と、その花の活かし方、さらに先に花を進めたらどうなるのか？と思いつつ材料として保存し、目標のF1育種と並行して別方向にも漠然とした目標を持ちました。

そのころ、私の育種の恩人でもあるサカタのタネの故須田専務から、「作ったものが儲かる育種、いいね！でも、花の育種で最も大切なのは、見た人に、ウワー綺麗！素敵！という感動を与えることだよ！」とハッとさせられる言葉を言われたのです。そして、ランタンキュラスのコレクションが始まったのです。

育種は「簡単でいて難しい」と言う「一体どっちなんだ！」と言われそうですが、私なりに感じたのは「やってみないと分からない！」ということです。大学では、F1育種は「二つの純系に近い系統を作って掛け合わせると、両親より優れた性質のそろった子供ができる」と学びました。「純系」作りは他殖植物の場合、近親交配を繰り返すことになり「弱勢」になっていきます。この時にこのまま近親交配続けていいの？かなり不安を感じてしまいました。結果5-6代目でF1を作ったところ、思った以上の子供を得ることができ「学んだ理論は正しかった」と思いましたが、途中では頂が見えず、不安ながらも続けるしかないに進めていました。経営が決して楽ではなかったのですが、なおさらのことです。周りの許容があったからできたことです。「継続は力なり」と言われますが、その意味が良く分かりました。

F1品種の育成で目標以外の副産物もたくさん集まり、「どのように売ればよいのか？」と思い悩んでいるとき、幸運にもメリクロン技術を活用できる環境を手に入れることができました。メリクロン技術は既に実用化されていましたが、ビジネスとしての利用は別の話でした。かかった経費以上の利益を上げなければ事業は成り立たないのですが、その道が一気に開けたのです。メリクロン技術を活用できるようになると、今まで「いかに均一に揃えることができるか！」が一番の育種の目標でしたが、たった一つでもよいから「飛びぬけた個体をいかに得るか！」という別方向にも目標を持つことができました。

今までのF1育種は、「無駄なものや余計なものをいかにそぎ落とすか！」「いかに均一のものを作り出すか！」に重点を置いて、外れるものは見つけ次第捨てられていました。グリーンや茶色の要素が見られると、目の敵のように捨てられたのです。しかし、メリクロン増殖が利用できると発想が一転し、「いかに植物が持っている隠れた特性を引き出してやるか！」ということが大事になりました。そのために実生個体の特徴を見て、今までにない特徴を見逃さずに観察・考察することが大切になります。そして、その後代がどう広がるかに期待を持って進めていくことになります。

実生していくと変わったものが出てきますが、その先は「育種は捨てること！」となるわけです。でも、私は「育種は捨てることであり、同時に育種は捨てないこと」だと思っています。自分の持つ手駒をいかに沢山にするか？それは市場に求められたときにいかにスピーディに供給できるかにつながるからです。それでも、それが経営の負担にならないようにバランスをとることが求められます。実際に種苗販売していくと、定番品種と流行品種をいかにバランスよく販売するかが大事になります。20世紀は全ての産業で規格品を大量生産し市場に投入していく時代でした。自動車や、家電、花でも製品を安定的に大量に供給するかが第一でした。しかし、バブルがはじけた頃から「個性化の時代」が始まったと思っています。全ての商品が、バラエティー豊かなものになりました。花の世界でもパリ発そして東京発で、結婚式やパーティーの飾りつけやブーケ等が日本中に広がっていききました。そんな時にたまたまというべきか綾園芸では沢山の品種や素材が圃場にあり、それがちょうど時代に受け入れられる形で世に出していくことができたのが幸運でした。

これまでに品種登録及び商標登録したのは、ラナンキュラスでは「エムホホワイト」他 21 品種、種間雑種のラナンキュラス・ラックスでは「アリアドネ」他 8 品種です。ラナンキュラスでは、早生、豊産、茎が固く真っすぐ、バラエティー豊かな表現、ラックスでは花卉に強い光沢のあるスプレー咲き、高温に強くボトリチス病に強い特性の品種となっています。当初は市場出荷が主でしたが、新品種の試作圃場を市場関係者や生産者に期間限定で開放したことにより、現在は生産者への種苗販売がメインになっています。おかげで、ラナンキュラスは生産者の評価が安定し、ラックスもようやく評価が高まり、種苗の注文も増加しています。

育種は『子供を教育するように、植物が本来持つ能力を引き出し、個性を伸ばすもの』だと思います。目標がはっきりしていて根気よく続ければ、出てくるものがあるものです。育種は誰でもできると父は言っていました。誰にでも個々の作業はできても、続けていくことは意外に難しいと思っています。そのような努力の結果、単純に「これはすごい！」、「これはきれい！」と言ってもらえることは育種の最高の励みであり、醍醐味だと思います。今後もしっかりした定番商品を作り、そのバックアップも丁寧に続けていこうと思っています。

コンパクトでボリュームあるミディコチョウランを作出

中国・ベトナムで生産、アメリカ・ヨーロッパ等で販売

椎名正剛：千葉県北東部、太平洋に面し九十九

里浜の最北端に位置する旭市で、コチョウランを生産している椎名洋ラン園の椎名正剛です。私は、茂原市の学校で5年間農業を学び、ランの生産農家で2年間の研修を経て、1976年にシンビジウムを主体とした洋ラン栽培を始めました。父は梨の生産農家でしたが、梨の収穫は年1回で、台風などで大きな損害を受けることもありました。それに対し、ランは研修生の時に高価格で取引されるのを見ており、金はかかりましたが梨畑に温室を建て、ランの栽培農家となったのです。

当初は、シンビジウムの外、コチョウラン、カトレア、パフィオ、オドント、オンシ、バンダ、デンファレ、デンドロ等、多くのランに取組み試行錯誤を繰り返していました。バブル前の高度成長期だったので、ランは業務需要が大半で、豪華で大きなものが高価格で取引される時代でした。でも、そのような中で、「どうしてランはこんなに高いの？ 大きすぎて家には飾れないよ！」と、大半のお客さんが話す声が聞こえてきたのです。コンパクトなランとしては、ミニコチョウランもありましたが、花持ちが悪い欠点を持っていました。それなら、皆に満足いただけるものを作ろうと私は決意しました。①ランの品格を保ちつつも可愛らしくきれい、②花持ちとバランスが良い、③コンパクトで存在感がある、④栽培が容易で価格が手頃との目標を定め、これらを満たすランとしてコチョウランの育種を1983年から始めたのです。

それからは、様々な親株を入手して交配を重ねましたが、選抜するまで4~5年の年月が必要で、なかなか理想の品種に出会うことはできませんでした。F2代目の交配では最初の選抜までに12年、出願後して登録までに3年と計15年がかかり、その間に莫大



ナオミゴールド

な資金と時間、労力を費やすこととなりました。それでも、育種と同時に栽培方法も改善することもできました。主流だった素焼き鉢での水苔栽培からバーク栽培に切り替えたことで、フラスコ苗から出荷まで2年半~3年を要していた栽培期間を1年半~2年に短縮し、全体の回転率を大幅に改善することができたのです。この結果、大輪のコチョウランとミニコチョ

ウランの中間に位置する育成種を「ミディーコチョウラン」として、多くの品種を誕生させることができました。ミディーコチョウランは、コンパクトながらボリューム感があり、単体でも存在感のある私が目指していた理想のコチョウランとなり、その地位が確立されるまでになりました。

「ランラン」と「リンリン」の2品種は、それぞれ1万鉢のクローン商品となり、当時の第一園芸を主体として12主要市場に出荷し、大きな反響を得て好調な販売を得ることができました。注文価格で飛ぶように売れるとともに、セリ価格が注文価格を超えた高値で売れることも珍しくありませんでした。2002年には、オランダのアムステルダム近郊で開かれた国際園芸博覧会（フロリアード2002）に5品種を出品し、全品種で金賞を受賞できました。その後はアメリカ、オランダからオファーがあり、海外への種苗販売を行う契機となりましたが、日本でのクローン苗の価格が高過ぎて国際競争力がなく、大量販売には至りませんでした。そのため、生産コストを下げようと中国の北京に生産を委託しました。品質や変異等の問題も生じましたが、努力の結果2006年から北京で生産した苗でアメリカ、オランダへの販売を始めることができました。その後



に育成した品種「ハッピービビアン チュンリー」も年間150万本のクローン苗がアメリカ、ヨーロッパに販売されています。海外旅行の旅先で自分の品種が販売され、お客が購入してくれる姿を見たときの感動は忘れることができません。

私は、直接購入される消費者と接しながら、どんな品種なら喜ばれるかを考えて開発と販売を行ってきました。消費者に喜ばれる品種の開発が成功に繋がったのだと、育種者としての幸せを感じています。一般家庭で手軽に飾ってくれる品種を育成してきたことで、幸いにしてコロナ禍にあっても巣ごもり需要により、前年と比較しても需要は伸びており、これをチャンスとして、花を飾る文化がヨーロッパやアメリカのように定着するよう育種と商品開発に力を入れたいと思っています。子会社の椎名上海花卉有限公司、系統農場の北京とベトナムから、SHEENA(椎名)のオリジナル品種の販売を東南アジアへと更に広げていきたい

です。

👥 活動暦

- 4/2 かわら版「育種の波動」第7号発行
- 4/20 改正種苗法に関する説明会
「～法改正の概要と留意点～」(オンライン開催)

🌸🌸🌸🌸🌸🌸🌸🌸🌸🌸🌸🌸🌸🌸🌸🌸

🌸🌸🌸 伝言板 🌸🌸🌸

- 🌸 4月1日から、改正種苗法の一部が施行となりました。この改正により、品種育成者が安心して権利の行使ができるようになることを期待したいと思います。育成者自身も、育成した品種がどのように取り扱われているかをこれまで以上にしっかり監視する等、自らの権利を守っていきたいと思います。
- 🌸 育種賞・育種功労賞の候補者を10月20日までに広く会員から募集することとなりました。「この人はどうか、この人にぜひ」と思う人がいる場合は、事務局に早めにその方の名前、育種している植物名、その人について知っている情報を連絡ください。推薦状の作成等について等について、お伝えいたします。
- 🌸 今号でも、3人の会員の育種の実績を紹介しました。2月に入会された大塩さんからは、サラリーマンを辞めて就農し、ハボタンの育種によって農家になれたとの実感を得たこと、草野さんからは、育種の目標をしっかりと持って、粘り強く育種を継続することの大切さ、椎名さんからは、ランに対する消費者の声を実現しようとこれまでになかったミディコチョウランを育成してその地位を確立したことが語られ、それぞれ印象深い内容でした。今回の3人で、これまでに20名の会員の育種の実績を掲載することができました。協力いただいた方に、感謝を申し上げるとともに、今後もこの育種の実験記事を継続してかわら版に取り上げてまいりますので、ご期待ください。引き続き、記事作成へのご協力をよろしくお願いいたします。

このかわら版についての意見、情報提供、感想、問合せ先は次のとおりです。

全国新品種育成者の会事務局

岩澤 弘道

090-4059-1096

Fax 03-3691-2818

Eメール iwa.hinsyudebyu.512@gmail.com